P102

家財を投げ打ち国土づくりに邁進した金原明善の生涯

日本工営㈱　コンサルタント国内事業本部　　○井上　公夫，今村　隆正
国土交通省 中部地方整備局 多治見砂防国道事務所　後藤　宏二，野　昭夫

1　はじめに

金原明善(ｷﾝﾊﾟﾗﾒｲｾﾞﾝ)という人の名前を初めて耳にしたのは、濃尾地震(1891)で発生した土砂災害の追跡調査を行っている時でした。今から100年も前に、濃尾地震による山地荒廃状況を丹念に現地調査し、被災状況写真まで残した人物がいると聞いて、興味を持たずにはいられませんでした。濃尾地震後の現地調査もさることながら、家財を投げ出してまでも天竜川の災害防止に努め、公共のために捧げられたと言ってもよい生涯に、大きく心を打たれました。

ここでは、金原明善の活動を一人でも多くの人に知ってもらうことを目的として作成した冊子の内容を紹介致します。

図－1　金原明善

2　金原明善の生涯

金原明善は、天保三年(1832)六月七日に天竜川のほとり、遠江国長上郡安間村(静岡県浜松市安間)で名主役を努める父久平とその妻・志賀との間に長男として生まれました。大地主の家に生まれ、家族の愛を一身に集め、何不自由なく成長しました。ところが、14歳の時に、生死の間をさまようほどの病にかかってしまいました。髪は抜け、精神も放心したようになってしまい、長期の療養生活を送りました。しかし、19歳の時に奇跡的に健康が回復しました。後に、明善はこの時の病を「私の現世はアレで一つ終わった。全快した後の世は未来だ。」と回想しています。

江戸時代には青年名主として郷土のために尽くしました。度重なる天竜川の災害を少年時代から何度も見てきたことから、明治維新以後は、家財を投じてまでも、治山・治水活動に献身するとともに、出獄人保護や水利学校の設立など、社会・文化面にも貢献しました。他面、金融・交通・製材などの企業を起こし、さらに晩年には各地を講演行脚し、植林思想や治山・治水活動の普及と社会活動に努めました。

明善は、嘉永二年(1849)七月二十六日、17歳の時に生母・志賀を失いました。志賀は元々虚弱な体質で病床にあることが多かったため、彼女の死の数年前から後妻になる「さわ」が金原家に迎えられていました。さわは初婚の夫との間に「玉城」という女の子をもうけていましたが、離婚していました。志賀は玉城の身の上にいたく同情し、「必ず玉城を妻に向かえるように」と遺言しました。その後、安政二年(1855)、明善23歳，玉城16歳の時に、母の遺言通りに結婚しました。玉城は大家の主婦として多忙で苦労の多い生活を送りました。主婦としての責任感が強く、明善の仕事を良く理解していたため、一番の心の支えとなりました。このような夫婦の愛があったからこそ、明善は多くの事業に邁進することができたのです。

明治元年(1868)以降、明善は天竜川の治水工事において、主任的な活動をするようになりました。その後、明治八年(1875)、43歳の時に「治河協力社」社長を命ぜられ、本格的に治水工事に着手しました。この頃から、「遠州の義人・金原明善」の名が広く世に知られ始めました。

3　デ・レイケとの出会い

明善は、事業を起こす場合には、準備工作として念入りな基礎調査を行いました。天竜川の治水対策のために、水源地である諏訪湖に至るまで綿密な調査を行っています。また、明治11年(1878)「水利学校」を設立して、技術者の養成を行いました。本科は測量・図画・実地修業、予科は国史・漢籍・翻訳書を学習しました。卒業生は治河協力社に勤務して、測量や改修工事に従事しました。また、工部大学校(現東京大学工学部)卒の小林八郎を社費でヨーロッパに留学させ、新しい技術の導入に努めました。

また、明善は当時の権威者を次々と招きました。明治7年(1874)には、内務省の治水技術の最高顧問であったリンドウ(オランダ人技術者)が来社しています。さらに、明治11年(1882)には、大井川の調査を終えたデ・レイケが来社し、2週間滞在しています。詳しい記録は残されていませんが、木曽三川の改修に悩んでいたデ・レイケと明善は夜遅くまで、議論したと思われます。リンドウやデ・レイケの協力が得られたのは、明善の熱意の現われでしょう。

4　治山・治水と植林事業

明善は、明治19年(1886)から大正十二年(1923)にこの世を去るまでの40年間を、植林と取り組んで精力的に生きました。明治維新以来、郷里において天竜川の治水工

事に専心しましたが、事業家として多方面の活動を始めたのは、明治17年(1884)に治河協力社を解散し(国の治水事業となった)、居を郷里安間から東京に移してからです。その後、金融・運輸・製材、出獄人の保護事業、北海道開拓、植林事業、疎水計画など、多彩な活動を続けました。

特に、植林事業には精魂を傾けました。**瀬尻御料林**の献植、金原模範林の達成、天城山御料林の委託植林など、各地で治山としての植林を行いました。また、身延山・岐阜県根尾谷・富士山麓・岡山県・広島県などにおいて、講演・植林の実地指導を行いました。

一般に山林地主の植林は利益追求が目的でしたが、明善は純粋な公共心から植林を行っています。山川を国土の骨格と筋脈にたとえ、「これが脆弱であっては、国家経済の発展はあり得ない」として、治山・治水・利水を三位一体と捉え、総合的な国土開発計画の実現を目指すものでした。

明善は、我が国の激動の時代に生き、天竜川や根尾谷の治山・治水活動、金融・運輸・製材、出獄人保護活動、北海道開拓など多方面に渡って精力的に活動しました。特に、53歳から91歳でこの世を去るまでの40年間は植林事業に精魂を傾けました。明善の抱く最高の理想は、「全国の山々の緑化」にありました。明善が養成した専門家や人足を率いて、全国どこへでも指導に出向き、各県の山林会の組織化に奔走しました。

5　濃尾地震後の現地調査

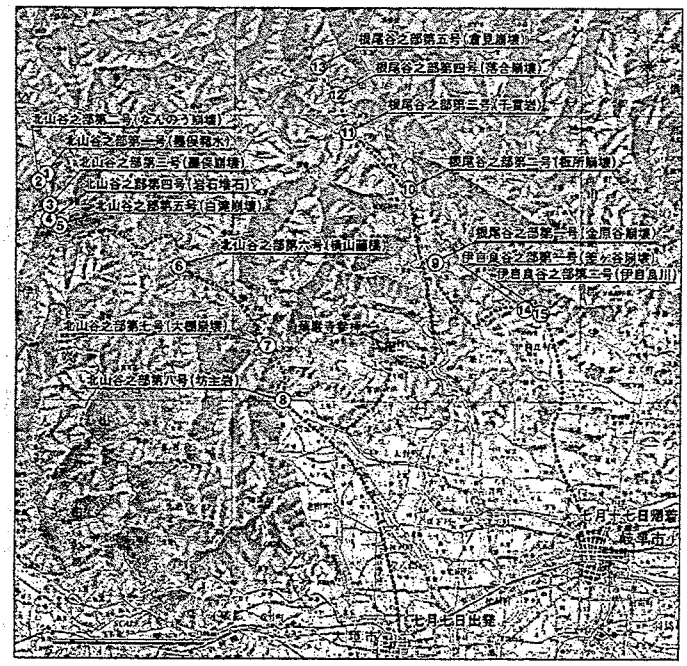
明善が瀬尻御料林の植林に取り組み、事業が軌道に乗り始めた明治24年(1891)10月28日、日本で最大規模の直下型地震である**濃尾地震**(M=8.0)が発生しました。日本は、まさに文明開化の時期であり、当時の最先端技術であった鉄道や紡績工場が大きな被害を受け、濃尾平野を中心に7000人以上の死者・行方不明者を出しました。

特に震源地である根尾谷での被害は大きく、家屋はほとんど倒壊し、山崩れ・陥没・地割れなどの地変が各地で発生しました。当時の根尾谷の人口3346人の内、死者142人・負傷者290人で、総戸数715戸の内、倒壊家屋が675戸もありました。周囲の山地斜面一帯ははげ山のようになってしまい、おびただしい崩壊土砂は河川を堰止め、各地に**天然ダム**(当時は**豬水**(チョスイ)と言った)を形成しました。

このような荒廃斜面がしばらく放置されたため、豪雨の度に土砂が流出し、下流の木曽三川の平野部では洪水が頻発しました。

濃尾地震から6年後の明治30年(1897)に、岐阜県知事・湯本義憲は金原明善を招聘し、現地調査と今後の対策の検討を依頼しました。明善(当時65歳)は、7月7日～17日に大垣から揖斐川上流(ナンノ谷崩壊)や根尾谷・伊自良谷を、自ら先頭に立ち、地元の写真師を同行させ、現地調査しました。

明善は、現地調査後、地震によってはげ山となった斜面の対策を「建白書」として作成し、15枚の被害状況写真を添付して、明治天皇に建議しました。この時の写真は、浜松市の明善記念館に保存され、濃尾地震直後の土砂災害の状況を知る上で、大変貴重な資料となっています。



図－2　濃尾地震後の現地調査ルート

その後も、明善は岐阜県下において視察と指導を継続して行い、明治33年(1900)には3ヵ月も根尾谷に滞在し、植林事業を激励し、その翌年には杉苗4万本を寄付しました。

現在、根尾谷の山々は、濃尾地震で一時は全山はげ山となったことなど想像できない程、見事に緑が回復し崩壊地もほとんどありません。現地には、岐阜県本巣郡林友会によって、昭和3年(1928)に「金原明善頌徳記念碑」が建てられています。

6　むすび

瀬尻御料林、金原林の木々はますます成長し、模範林としての名は高まりました。

大正11年(1922)6月、死の半年前、医師の反対を押し切り、「自分の育てた山で死ぬのは本望である」と言い、91歳で駕籠に乗り、最後の山廻りを行い、見事に成長した木々をなつかしそうに見上げ、感涙したそうです。

本稿をまとめるに当っては、金原治山治水財団理事の方々をはじめ浜松市の明善記念館館長に大変お世話になるとともに、金原治山治水財団(1968)、土屋喬雄(1958, 68)などの記載を、金原治山治水財団の了承を得た上で引用させて頂きました。また、終始暖かい励しの言葉とアドバイスを頂いた(財)砂防フロンティア整備推進機構の田畑茂清理事長、並びに、国土交通省砂防部の原義文保全調整官に厚く御礼申し上げます。